

琉球大学学術リポジトリ

大和俗訓 壱部

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-09-08 キーワード (Ja): 所収コレクション: 琉球大学附属図書館宮良殿内文庫, 宮良殿内 (みやらどうんち) キーワード (En): In Collection: The Miyara-Dounchi Collection (University of the Ryukyus Library) 作成者: 貝原, 益軒 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/49126

皆是をうなぎしれど人皆仰みしるの心事
自ら乃と酒肴にて一夕乃とあひの如きあらま
をあらしき事にて多くは以て自食同食を以て不
乃人されもあまえどもれども一毫もれを
食ふくわざとめと目とあれ、自月の光明とかもと
早とてあらはれども又湯煙より過必食とぞ
早とてあらはれども又湯煙より過必食とぞ
小人主休まうてあざり、主と休まうてあらはせば、西風の
夜陰をうめひそ恥をひしませんとそくはかせを
はれども喜んでかへり是小人の心をひき、かへりと
云へ一尚書とあらずともらく非なると書か
れどもや異人ともとあり沒九人をぬと云ふ

以之為君子也

の善をえど、我も又此善めりすとあひ是を海を御
有り、今は若ばれど、我と又此の善ありゆと考を
うすもあそれくらうあひ以ひ（一）おひそれれども、
正多喜の如也、嗚う助とひつ老と若人（主善の
師承若人若人）は實と之るも此云なり

の實を以て事を成すものとよ
り、之を以て事を成すものとよ
きの外、善より事より成る所又古の傳
へよからぬをよつて善より成る所又古の傳
より善より成る所又古の傳へりと云ふ

ありひよをほし
一ノをかねあがくもく
てむちひたま
かく金歎うちまくられそやくと

此をあらうゆゑ

中庸曰言顧行行顧言云言は言と行は相違ひ
言は生とひがひのれとすと云事が行は
ひは言ひとすと云り言事やまく行は
すと云ひひと云ひ言事やまく行は
言と行と云ひ言事やまく行は
きと云ひ言事やまく行は

若も行とすと云はてすと云ひ若も行は
すと云ひ行はてすと云ひ

右源氏忠臣二君より一を送り事あつてあひて
事あつて道節義をすて候あつて事は節義と云ひ事
はつて帰はてあつてあつて事は節義だあつて
二をかく二をよつて一をあつてあつてあはせと一を寄りて
ヨリ才根元よつて一しよもと云はて事よつて
才根をあつて一しよもとも忠貞の志ははめ
うるを節義と云よもとひよひく才根あつてうる
一しよもと云はてうるを節義と云よもとひく才根をのと
才根をもとてうるをひく才根をもとてうるをひく才根を
うるをひく才根をひく才根をひく才根をひく才根を

要石をもつてあすそ人より此肉をのむよがとすをいふ
死後は骨の筋も又は骨肉なるをすこすと
その心てとひ死をもとまるに死骨をじてひくひが
骨をいきまどひてよひてよひてたり而黄をまじむ
人道をうかひくせよ、考るうひあき、而ひまじむ
あんや是人へつとあひて、(き大良)

凡人ほどのれりす、風にとどくにあり、れよも又とど
て、營業ニヨハ、盡生ニヨハ、營業ニハ、民を
に、とどくにとどくにとどくと、士、考るは、(度ニ、商ニ、各
主、營業をばとく、主、營業を取るを云ふ、業をつ
きあひて、創立、實業をすくは、是人、度ニ、商ニ、各

もし、さるに、財祿あへて、補て、膚す、營業、只
多食と、居處をひく才ひや、一、生計、ハ、肉、より
二、主、養生、は、飲食を、過七、嗜、の、肉、欲、を、うと、記、居、動、欲
の、於、京、城、所、と、凡、事、異、異、異、外、邪、を、妄、此、生、命、を
養、り、し、く、病、か、長、寿、を、ねん、す、セ、補、て、云、營、業、
も、が、れ、て、は、病、生、て、か、が、く、又、ひ、す、れ、生、る、天、也、
な、り、か、て、元、又、人、代、よ、と、し、て、き、す、り、す、二、五、六、營、業、
才、才、を、あ、ひ、ゆ、く、人、偏、の、た、を、あ、ひ、ゆ、く、人、道、を、失、り、元、營、業、
事、事、を、れ、て、立、義、を、行、く、れ、て、人、道、を、失、り、元、營、業、
て、富、素、よ、富、主、生、成、あ、ひ、く、名、生、を、ほ、く、も、の、た、か
う、富、業、と、う、して、い、ぢ、う、し、外、古、の、重、く、れ、た

事業をよくはなし——又其生氣ぬまきが前もと
のまことにせぬをよても——又義をぬまざく
せんれをねまひ事のとてあく義はとふ——
愚鷹すり人道の太氣をり禽獸は愚鷹すりも無を言
ふ人とす愚鷹すり禽獸もし——是人や禽獸
と曰ふて而智り乞ひをひ愚鷹すり人道の太氣を言
ふすひ——而智り乞ひ愚鷹すり心鷹すりとて
さうひすきる事同——且を報ひすとて愚を言
ふ事あり天地の恩父母の恩主君の恩此
恩是も——而天地が今大父母なり父母の恩
即天地の恩也人天地の恩もりすとて又しませ

後天地の恩はうそもあざれむ而天地の恩是大
行く事とゆる——而天地の恩はうそも天地
の恩もとすひとこそじきうる是天地は——まくもあを
はく——と恩の事一を詔もるなむ天地の恩もとす
母と育んぢや——とるをひ天地の恩もとすとて
ゆく事のをうそくひす是にむりにとあられの
ゆかりに失ふる天地の恩もとすとてにぞりの
う天地が——もあふ人をあくも——次も——あ
れを也——とゆそすひと人情を厚く也——
浮も無氣の事をも——とそあざる是天地
の恩もとすとて是天地にぞりにぞりの事也

まつて、やまと馬の馬一をじよへたすり、天使の火の火を
まつて、人火を燒くふれ、毛毛燒くつまつて、麻火の火を
人火を燒くまつて、一生て、毛毛燒くつまつて、毛毛燒くまつて
毛毛燒くまつて、が、人火を燒くまつて、毛毛燒くまつて、
此事、お毫も、流り、ソ、モ、初事の、人火を、せんま
と、も、し、や

父おそれだ、おまえも、どうも、おせなうけ、初天孫の、真武
そりと、生じて、是天孫、生の、おぢり、まとしられて、後
はけぢれ、すり身を、あるがまま、天孫の、身を、うけ天孫
生むるねを、命と、命と、命と、命と、命と、命と、命と、
か、天孫の、性をうけ、常の、體を、ゆるす、ゆるす、ゆるす

萬物は空より天地の間より天地の間より
天地より生れらる初より力あるまゝ天地は身を
うけゆかばくかのち思あは事なきアリて身
であるまく天地より生れり事を引ひまきにせり
萬物は萬物より生れり事一毛一間に一大事也而
まくまくまくまくまくまく

力を立力せらるのをだらを演じてつゝ此の見ゆまを
まくしてああへやちらへおじくらむに付まし
今も父の身はまだだらにまくして身を引ひ
父も身もまだだらにまくして身を引ひ
娘りう代するをはらむるをひそひそひそ
ちうだらくしてあをせりまつて一日と身を引ひ
あがたまよしに父もよつて身父もうだらを
かむとりふ事へゆく

父母もれを生とつて心の毒ひよめられを極め且宣
君の旅をうけとよが身を養ひよのとくば父母
妻子をやうひぬ涙をつて身度居を無くまへ

用ととわべて安あよせ体もとを身ひよと思ひ
まぬのうり是又少ぬよびのくと身へびらもよつ
うかえれどもとまわく身をよぶれどとくとく思ひ
あらむとそ身をゆきむらなり清涼よみのり身
父母被端其り東君被致其身とぞ身なり

父母もれをよすやうううとども妻人の故かけまへ
人の身をよだなをよざれを食えあと身をあへう
に着あて布をやまとととの道をもとて食歎まちう
れどもよしまれをかひゆくあえをうへうへは
アエアエは思ひ思ひよひよひよひよひよひよ
世の娘まどいとたうううううううううううう

かく、聖人代教するといひ、とてはもしかば、一毛
聖人代教語也、とてはり
もすそ天地父母、とて聖人代也、相即びて、むりて
あり、此意をもとれしむる、あくびて、すそ
ひく、せん、あくびて、それをして、りとおもて、をもるべ
御前すあくびて、のたまふべ

今此世の道を教ゆる師の首をさへあらば貴とびつ
きを道を教ゆける師其の身をさへあらば貴と
えびす又書体よしむらの師を向洋の師と云
え書体よしむらの師又よしむら是が、秀吉堂
の墨より、是秀吉の師又よしむら是が、秀吉堂
の墨より

此外人の生涯は、無能うるゝのみ——あよそ人の
憂鬱うげの心地——よりなり——一言の特とも感へ
事は、毒草もかよもとく、子育て——扶養のまへ國を
もぐれをもじくくもく、年々にむかひ終也
司馬溫公の曰く、代無才をもろしよ也び——もか
もく、心患焉焉と、此言、乃は理也也をり。往々其を
えぞくほきうりの、患焉とひり。——患焉と
君家の恩を、心患焉焉と、語源よ。其家の知、本來、
ひりこと、一も恩を、もくさう、ノハ、心患也。君家に
天地よつて、にぞれのひ父の、もくさう、ノハ、心患也。
忠をほく、而をうそび、故舊に、あくまでも、皆也

をもくぬのをりん代性とよまく、主事する所へを
尋ねよせれど、御前をつゝあれをめぐらむあり
是こそ天性のとれど、而よりて若引寄よしを
又よのつれすが方あきと、更にゆがめれど舊題を
よすりてあら、義射とよる

右治曰施恩勿念受恩勿忘

あきらめのむきうをうけ玉城うり、武機をあきらめ
めうる事あ、さうこそうれの良の説義をほとも
べくとぞあつまつてお初よとし見ても深
きをかき、今よきをこれでお高き説義をあつとひ
くかうじよし始末一乃くま。一九恩をうむる
世の凡人代をひかれせしもくらべ相が力うふ
えまく人情をかひと魚をまくとてお玉城うり

人情をあく色に思ふ國へひりて又神をなす
「古今の民神」と是の聖玉是民を教へ
て信神之力を身ひりて事にてどもく神事
を能ひ「神ニあり天神地祇人鬼なり天神
天の神靈天より月星も太角もあら地祇八地ニ有

神靈なり若山大川の神社覆は神も山川あり社覆
と國々と力殺し成る神なり鬼と人死て神なり
もと云ひて神父母先祖の神なり是故ニ一五
先祖宗廟の神ありまつて有てこれを神ハ忌ナリ
主祀ナリ又先祖もあらも人氏も功德ありナリ
主祭者鬼なり是又神ニ有て有て是モ神也
主神を亦之ニ有て是モ神也ハ余ニ人主作地神
鬼ナリハ余ナリ主神ナリ有て是モ神也
神あり力もあリ神ナリ有て是モ神也ハ余ナリ
主神もあリ神ナリ有て是モ神也ハ余ナリ非
有て神ハ能能ナリけむと曰ク者もあリ神ナリ

今へあへたがり徳あるがゆうとくをもとめ
西ありあまく一鬼神を敵ひて進みて重代を
モリをき神、あれらをすく一うちあらう
一ゆうを五云大へんとて、あれらをうちばくをめ
毛遂カニをすく神の角カツらとくもと此意シテあらへる
にちづきあるどうくへ、あれらをさう

この世に生れしもの道をまよひぬるを
くよれ奉り人の言ふ用うるをひらゆくを
うしもててお能とつる忠臣ありとぞれまろ
興る事り此人をうて出陣とる後も小早川
秀虎とてかくふ御身をよひ集ら食事にて

此處の城郭よりうなづきて立たまつては、いはせ
ひきあきまうとも、まかでよて、と向むくよれを
機び用ひとかひくよくはうて、伏見のすゑくちり
べきと源をへて、發出津をへて、飛とひとあら軍
のとて、敗軍を、血の虜敵を、しとせ、元軍の小
伏見と大軍、小軍、當ひとて、とよくとて、そ
車を引ひて、とて、孔ふれ、と軍を引ひて、まよひ
時車よのうと、おそれ源をこのへて、かうをあらじ
きんよのあひて、ひの意なり
今般ひと番かねて、要伏見をひりとよひとんじ
利害、夜燃毛情の松伏^{ヨウ}よりしきを、要をし無す

をかくかくと嘗て見る人多にまかれてゐるも
つるまきしやうかはせをうそをうそをうそを
うそをうそをうそをうそをうそをうそをうそを
うそをうそをうそをうそをうそをうそをうそを

うそをうそをうそをうそをうそをうそをうそを

主事御用士六溝蟹カウガタあゆと云ひれど雷士六や元を
りすと云ひれども又義はる志士六とひりすと
又義はるてうゑと溝蟹カウガタ小ゆまづびて死なるを
主財まで義理を云ひれど又義はるもし士六とひ
ふと義理と云ひうゑとひ死なるをもととすと
義理を云ひれども又士六と云ひ義理を云ひ
きのうて死なるをもとと古くもソヤノ代命カ

りぬれど義理又命より甚あり故よ生氣の大
事にのぢんくも義理と云ひてかづるりあひてうゑ
ひぬ右利ぬる財主六等の怪きれかひをうゑ
是をひきがきくあひなれれど失ひりぬかまそ人の
欲富貴をきくじふあひゆりもひれど富貴よ
と換ひれど命より命よりてハ富貴もとくし命
くわどまれぬれど義理よあひて、命をもうそく
もうそくうゑと義理をもひれど義理をもうそく
うゑとうゑと義理をもひれど義理をもうそく
うゑとうゑと義理をもひれど義理をもうそく

卷之三

人を生むる道をあつてゆにむかひよきのうへ
身をよみがへる事あら若事をひそへぬへ
主君父の

留給兄長がとくにいたる處をもどり、留着する
又人をもとめねずと、若きは乞食のをばしてかま
ぬ、せむと好んで、此財を用ひるのをかまぬ
只人ひ難いをもと、とて、かむり、留めまじめ、財を
多くあつてと、金利、金利、もよやうと、其
があつても、其財を大むりぬと、が、食くあひて、あた
又食くあつて、ふと、金利、と、月々、病とからうえ
うるをふか、金をあつても、利益をうきこめし財を
多くは、すても、主事の事、と、因ゆゑ、人の財とあらう
ゆきとて、百姓をうつても、あつて、財をつゆくまの
と、あらう利益をうつても、あつて、財をつゆくまの

うちかく手を引く。若をはじつたらかしある
のぬうう。まかかの因と謹被りゆうう。貴成の
ゆく。おれもそだよし。あやて。あれをうむ
まき。おのる様よ。此れ。右今かく。ゆく。まく。あ
き。うこう。まう。くれど。あは。若をじつて。もみ
とのそじよ。あ。も。自分の。う。と。云の。と
せ。後。年。同。は。股。の。歎。を。や。か。ま。に。ま。を。あ。じ。く。と。

はるか年月は股の筋を一ヵ月にもどるをかじてゐる
されど足がと少し筋走るがひかと云ふ事より
世間のあたたかさう人の道をすゝめを行ひ
たまうじい人を西へてゆくが此世の中丈幅
ありあたまに歩きすと若狭川あひえらゆ

きよしの事と至
天理よさうひ人道を以て
人をあれじと申とぞてそろそろ徳を修
め富貴のことを教ふれ事なり(ト云)
富貴は人英國をうきのをあれと申とぞと申
れし
是富貴をねらふ福徳をうけしれ
をねらふのを
耳目口體の能じよれ候りて
そももててあと申とぞとぞれをよしと欲を引
まふ事は汝のよきひよりくよ害めく事
あもく事と申とぞ

後漢光武帝の子東平王秀は嘗て殺人を犯す事で獄に送られ、明帝即位後も即ち獄に送られ、東平王秀は

ゆゑの爲め、最^レはボン^レリ云ひ乍れ、嘗てあやて居筆
民の多病地をもくし、輶客疏隔^レを表すと善を
見る、むすめの事に就り、必ずも、嘗ての事は、善く見る
而して事は、必ず^{ニラ}、善をめ、志すは、善を
至るの事、まよひ、目と善をめ、してゆき、ひやく
き、まよひ、一、況當事の、善をめ、とゆき、
廣くして、まよひ、善をめ、一、東平主の、善じ、ぢ
うもれ善をめ、物を、ゆくも、すらじほ、す

尚書首領を患ひて云ひが事かほくと云
をもれど小もうぢるのあひくもうかひ乍らとあ

すよ哉を乞ふべし事の内へ圓滿ある故無よ矣
礼あるとぞ引ひてうれひが 未だ候泊りて財
きく之あまび小うぢるをよあひくも 圓滿せしの處の
ゆき落ちのち あ因のつえとぞき私欲をもとを
後乃用意を立てて 一たれ時も度ひのる時の竟
始がけは思ひ度はめひとまばく明白の事と
もくを身の事とす今年より初を身とす
只今うつもし一玉 てあはれ邊地をもうに
もてあひもす 人を死にきるはめをひうね
ありと至るの事

大和始訓卷之七

周氏集解

大和始訓卷之七

解行下

人の力に京質ありを處とあゆうとあはれ道す
病あらわし病あり 〔醫をまつて〕京質 〔計を〕
て病せられども心を力小あゆまうり 〔せら〕
せられども 〔が〕病あり 〔事成れ〕 〔計を〕して病を
せられ 〔が〕病 〔が〕 〔が〕 〔が〕 〔が〕 〔が〕 〔が〕
きへめく取し 〔は〕 〔は〕 〔は〕 〔は〕 〔は〕 〔は〕 〔は〕
又こうしてくよむくのり
京質へめく取らんやまび 〔は〕 〔は〕 〔は〕 〔は〕 〔は〕
つと先とゆまう 〔が〕 〔が〕 〔が〕 〔が〕 〔が〕 〔が〕 〔が〕

うども人見のいきそひの所と云ふ事
知らうとあつてはもしもあされものなり
是てしまあされんがたまつてしもとてひと
即ち地の通て人れ法うてせきとてせき
人れ法うてせきの事ゆと通の在と云ふ事
人れ法うてせきの事ゆと通の在と云ふ事
あは坐るのために人れ法うてせきのた
あり膳食より食のたあり言ふて言の道より初より
初のたあり視るより視るのたあり種より種より
あり道を引くと事じてはあは事を
ひく謹とてあはくもじをもくとてあはる
力を修しりむ

身に金て吝嗇あれば財をもとめても人をもひめむ
する。吝嗇がまると人に金よひて用ひられず。確
きとてうやまきのゆ財を化めと。あ事を
あがいと門上階よりあを食食人馬と食食
三ともを以て元をめざめざと食を
あこび又を極る害事うて渋るよりまきひ事
小於をと減の用をうがる事は入金うえううにと
はいとめ玉丸のうがる事は弱りたる事にてはま
りくほれあれ事と事はくじまをひまがれと彼
う事うえをうべうじまをひまがれと彼
う事うえをうべうじまをひまがれと彼

用ひて人代りてとある事をあひて人を
すゑる
程子曰財をあそぶより貧乏ひゆうと云ふ
して若ともより貪るべし此言ひりうも財を
用ひてきを言ふいへどかくとも人をもひは
人をすきをもひはまへども忠をばくとれ
ゆをもひは項明を以人へにとひも是ぢ
又凡の事どもまかせばかくまゆ故
若を以へよまひてま事財耗とゆのを
正しも人を又経とて感通の理も
禮義廉恥の如くいえども人をもひを也

かねどもあやまちを外へられを人をせ
べくもあくを事じふせきしてまふ事とせ
せんとそれと人あらひのうと多くてせ
事多くて人の事はいめどもじつと人代りを
りされして人をうへきやどもじつと人
聖人をもひを外へり聖人をもひを外へ
九人をゆうと九人をもひをゆうと人
人あらひをゆうと人あらひをゆうと人
人あらひをゆうと人あらひをゆうと人
ひよゆうと人あらひをゆうと人あらひを
ひよゆうと人あらひをゆうと人あらひを

多色上衣とく見事力があれまことにとて大富事ある
人も於めくも欲しがりて手がしやれ合ひ
やどくと手の或人むちよとれはにもあれ
世の中よりもれどもせれもこそあれとせらむ
酒食をとて病をすまうのゆゑ言ふはまう
是きらははあからくと象せるあゆまられ事は私放ふ
れに才をとらむのむり難をとく(う)う、年(アラシ)のゆゑ
陰陽がとる、圓鏡のゆゑ此六事とされ才と歴成
きりうきつとあくられと云
若をもる事、やどく若狭(アシ)にひくと若狭(アシ)にゆく
う事、やどく若狭(アシ)にひくと若狭(アシ)にゆく

而多くノ代物をあらわすと、や、西船をせうる。う
望古の名をすりきりの身の地名が、のせの風情とそ
も、うそせよ生れ古の法とあらうて、ゆくほどと
も、ひう事とよ害あう古法の用、古世をもける
とき、ハ、いきのる。前世の時、真とそし、うそと
風情とが、れど古世とよし、喜とあ、そむけ
あらはれど、道と、事と、病と云は、焼うけ法と云
せよ、海と、うれ、和と、あれが、うれと、ともわと、そと
そし、そと、れど、正、病と、じるを、と、元世と、海と、うれ
病の、中、うれり、
家常の病と、通じ古今和、後回一、前時より、あまうて

かくは誠の事より法より而よりてより
きと直へかざる事あひゆて古今の屋とあとの
國の礼法とそして之の禮法とそもなく古の礼法を
御考究としより但古の礼法の中へ禮法と肩を
して今世までりて宣せりりて御考究としより
うの古の礼法をりそく今世の時宣そもなはず
御考究と

忠信をもつて、ソノアリルくに筆を下して、人をあざれ
秋月をかくすからて、りよをひに節を失ふと、父母又
ト、妻夫ト、あくまし、玉音ト、つて、才をもじれ、詠歌を
きうして、うとうと、て、明月は、伝美少て、きのうく、あく

あまく、嵩りて内に向く餘傷にて、食ふと愈
病をめぐらし難難を正し、財欲をめぐらし難
らをとむに、其の志れど、武をすくへと軍用をうへ一度
約縁する。後半とくろひうづく休、學士と正
直漫句のまことひあそひり、すくへのそん事を
あそびがむかひて、是正直もくら悔もくらま
禍りむなり。

若ハ日とひかひ乍く様を尋ねて、あざりねた
（も）浦原を射ひて、元京を浦原へとすり、あ
そひく後へて、も陰あり、無からずりもあらず
まよそと、益をもつて、もれを代害あらわし、まよそ

あく、無をもつて、れぞ草木引て、病を去る爲をと
まち代せられ、済小害あり

右邊より、往動動則、圓とては、より利あらずと
て、うちあはれむる、より利あらず利をちじこらむ、而
害あや、養、田代にくわく、而殺を多くゆるも、工あきこ
だいとも、と高のあきこりし利をひくも、當つとも、も
出を利り、士、徳功とひて、而つ、なれど、忠勤を、た
ち一とれを、求め、れども、元の、寛あきこり、權をぬき、ひ
せゆき、養、益れども、あひても、あこごて耕、地も、うれ
自由り、もひそひ、六、器を、格へ、他まく、粗糙す
え、味、もれをひる、高の、うきりて、西山、て、村を

身の死後は自殺をうながすが如くしてはども、
お詫びせねばならぬとの如無と見ておる所もあり
お詫びの事の如きは他に多くあると、これまでおもられて
おもひがれをもつて立たぬまじ、又おのづから生れ
時より人間の才をもつてゐるが、三十歳の用事は既
それも一生の事業が主に、と自己覺悟をもつて一生
立つて、一本の立ちすがり善くあり、悪くするをもつて以
て一本の立つて、一本の立ちすがりと向うあつて、
また十日も月もつとしむと、一月の事は既
おもはる事二箇の如敷をまのと、あこがれがまづやれ
が、一日の事とす、終まつて、一日の事の書を

考定をあくまでおそれておゆきの所がござ
る日の後よりおゆきの所がござるが、今後お
ゆきの所がござるが、今日おゆきの所がござ
るであります。

先てせうてうれし事あらぬれどもかはれあらううれし
十日後ふれりとす日數多くて高とひどくゆきをれ
はれとれどもあらううざらむ興士とすゆめれをくふ業
をつとめておこううざる代庶民とすゆとし
智ハ引ひやまく御事とれりゆも二の元すがひよ
助とくらひゆりて御事とれりゆまとハ道徳をゆく高とを
とまればゆりて御事とれりゆをすがひよ
事とれりて御事とれりゆとくらひゆりとれり事とれ
事とれりやう事一、事とれりゆとれりとくらうその
事とれりとくらう又事とれりゆとれりとくらう事とれ
事とれりとくらう事とれりとくらう事とれりとくらう事とれ

アラギ
白衣の間立りかへりる時、よりてゆへるを余
よりよき事あるすとよをあぐやびとゆる筆
くすりをとてうむとくらひも又くわくと間立
りては、うきひとくをながるハシタシ、と
をさればあくねりとくとくとくとくとくとく
は、あくまうをもととて、筆事にのぞみと思ひ
せまうよりとく酒食がやくまじて病を
あらわしとて、時々のぞみと筆事にて、病をまき
のまくわす病を生じて、才を失ひてよひて
とく筆事にて、むがれよう禍をまねうる
らうむ

アラギ
身のあやまつては、あらぬのゆゑをほじりて、良美
から、ましりとのゆゑ、酒食が代わひにあれど人
辞退してぬけとも、あまく惜りをもじり、せ乃
かひりも、はるまく酒食をほじりて、それで、酒
食をこのじと諒をうむとよしとあらぬゆ
ゑを、かくして、相あはる

アラギ
身の躬自厚て、人をせしむる、應れど、うす
をうむ、まがりのりをあつて、十をよくせん
事を取て、多めに物のまづきるを、ひ
にあらぬ、人のまづきるをゆ。くもくも
かのちくとれど、のうみる

能治文を以てハ事す様ぐるを主とすを以て能治文
流思すて一言一句よひと用ひず松^{シロ}木と接^{シテ}は
能治文を以て出でしむる和音^{ハグニ}をすびも同一氣^{シテ}あれば
治^ヒ事^ヒ奇^ヒ徳^ヒと^シも能治文を以て徳^ヒ事^ヒと^シる
一^ト基^ヒをよきう^トの基^ヒを下^シと^シるふと^シを
うひと^シはよりと^シももえと^シにと^シくと^シたと^シく
基^ヒをと^シせば^シと^シかよひしてと^シくと^シはと^シるを^シ
字^シと^シ置^シ考^シに^シ言^ヒも又^シはよ^シと^シ案^シして接^{シテ}と^シ
字^シと^シ代^シ考^シ事^シと^シりと^シ此^シ故^シは^シ聲^ヒ考^シの^シ言^ヒもあ
まうもと^シ事^シと^シるを^シ追^シ定^シてと^シりと^シくと^シれ
小^シ聲^ヒ考^シと^シもと^シ考^シと^シー孔子の^シわせ^シ陳^シ事^シ而

十数日うて後あらまへまかをば
くされども必ずとてお命に任せ

居る所を改めて貴様を仰いだが、此の件は御心に
御りある少くとも少しありて、之をも思ふれば
若くとも御心をも思ふ事無く、此の件は御心に思ふ
過疎の事也と孟子の言ふ如く、則ち、財物をもと頃が
の事であつて、されど、徳は必ず必ず徳財をもつて
これ向處是私なり私を仰る事、必ず害あり、且
害ありて、必ず其代禍もあら、貴様仰り人、承受け
仰せらる、——利を仰よ、——今で見る若、誠に若

五
五
五

居子の道は止まることをりあひもあらず事をとるに義
をりこのじきよをとめにむじよきよをとめまども若
かりゑみれたゞくねきのとそゑの決意也
人内加の間の日人内加より百里の外を走りて人内
睫をそりて人内加より北の西を走りて人内加の西
を走りて人をうる事一晩に明けり私かけまへあり自
尺高す、高ひし私あひにあううとく人の話をせむ
事まことにうれをゆきとすがゆりぬぢり
富貴の人貴様このめ、富貴なりにゆくとくをもひき
利する處是處とふふとふふとふふとふふとふふと

若をこのまゝれど富貴のちうへずておぞもて金を過
先無事のあらゆる處しかばくかのを富貴なりとて
是きりひとぢり富貴よりむづかふあへる富貴なる
今般難よりとよく方をばれにてと成あへる
貴族のとあるより過るくて承多きとておぞもて
あれど富貴なりとて何を過るくて富貴なる
故事と云ふ事とくさうをやうかくもかとてとひの印を
云ひ事とばとあまきとてあうされど事がそれもりて
うゆきしてひと事成難と云ふ事をばとひる
夫事をいふまゝれどあうぢうせれぬ一日小十日の事を
ひとあうるる夫十日あまきと一日の事をひとおこる

はとじりととあるふあんれど

自從と云ふ事と云ふ事理とあまきとあらふふと人の
そとをうすとくとをうどまつてふと云ふ事と云ふ事
は懇い憂へ言とつるがゆい事と云ふ事と云ふ事
の説と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
そとをあそくまつて少く思ひを引ひと人のそ
とをあそれとくと云ふ事と云ふ事と云ふ事

耐煩とひつと事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
うちの附説をうそと云ふ事と云ふ事と云ふ事
あらうと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

えひゆ、自殺つともおどがじ事つとおもひ
えおもひた、氣しそうれく、心病をあ
今日、明日の計をかく、今月の来月の計をかくと年、
年暮れ計をかく、年始の計をかく、年あよく
死後の計をかくとあく

今日の御用の計をかゝる月の計をかゝる本
年未だ計をかか年生の計をかか年より多く
衣食の計をかか年より多く
明日御用の事あらば今より一ヶ月をかか
まじめぬる度を以て又をかか年より
かかのとて役を余す。そのゆゑに年を多
き事いふがゆゑに事のをかか年より多く
出来まきりて正す

中庸尤事發則宜而發則慶言而宣則已故事

徳川と後水の争はる所とて、
ひが事あら、後水とて、
争ひ事あら、

の身代りをあらわすものと見てゆる
事もあればと見てゆる事もあらうが、それで
どうぞお急ぎでござる事を、まだ一つも信頼を失
うてお後の身代りを失ふ事は、決して有難き事と
は見えぬ事があつて、身代りを失ふ事は、決して
失つてはならぬ事であると、身代りを失ふ事は、
必ずお急ぎでござる事と見てゆる事である
人の身代りを失つては、決して失つてはならぬ事である

さうしておまえの手を取るのをやめて
おまえを手を取るのをやめておまえを
おまえを手を取るのをやめておまえを
おまえを手を取るのをやめておまえを
おまえを手を取るのをやめておまえを

まゝ身の上はつひよるアヌをひし「人の苦手をあら
げうへらまひよらうこへとひるふまへいんとあれど
わむる人をゆめぬはまはまよあくまへなり
人をれぞそらへきどまうめのあやまらをうやまくし
えり口うめ小ゑあくそくかく即ち師めりと思ひ
うし「くまうめあもあやまらせをそらば
彼へき矣へりうれとあくそしゆくもまへ

ノの画をもつ事二の故あり、京盤の編り画をもつ
又あやまちをされど、ノ故ノ松よもとからあり、アリ
アリ、済よもともとある。此の内、京盤の編
の、画の事なり。ノ故の松画の、轉り、活用の後、
画の、事なり。ノ故の、縄と、アリ。事、矣。ノ故、
京盤の、あきら、
変化へ、以し。ノ故を、以ひ、アリ。わまと、アリ。
も、活用た。ハ、アリ。アリ。アリ。
ノ故、ノ故を、用ひす。アリ。ノ故事、ノ故、アリ。アリ。アリ。
も、アリ。アリ。アリ。ノ故を、用ひす。アリ。アリ。アリ。
アリ。ノ故を、用ひす。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。
アリ。ノ故を、用ひす。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

古事記としれども實はうら様也。是きひよかと云ひよ
うらはども少く公私富庶にしる事多きの間
事をすすめあせり少くしてとてとての事
されどこそしあせりてとてきる。悔のやうも云
ひてからとされ。今より後を以てえもる。悔
かうとすれども。あせりて後もとひし。六
五かくひすすり。易より謂をうべて。是も悔
ひる事。是れ事の事。うやよと。はくもじと
うて。悔のやうをすすり。はくも。うきよと。是
あせりて。悔あり。悔後干給。尚書小の事
方。悔後。天命に任す。今より。うきよの後

まじめに承じて一人をせしむる事は、人間の爲め
ざまにあらひて才のとれ若也、才を惜む是則
も也

今あよ並あひる若事を、毎日多く御前までて、
子と、富貴を以て、ひまからむに、是もすすめに、
ひらめきを、知らむと、あらゆも、も
丈大をも、一、實物をも、と、すすめに、
財を、うひそばれ、財意と、あすすす、ヨリ敵の内
も、ひかむる、ノハ、徳事小見よさうと、なりやあれ
だれぞのせと、徳事、うすの、ひからく、よぶて、の
れをあこつて、見つかるを、一椀の食をあつて、うらう

ひまくひ、うりう事か、人の、多きむ事か、うり
か、上、王公より下、庶人を、取らむる、ゆく、皆到り
る、本心、候りて、ま、若事、あて、き、ハ、すりう
る、
天地父母、兄弟、おれく、うりう事の、すりて、是を初
め、うすと、人、天地の、事体を、うそ、て、は、そし、ま、父
母の恩を、うそ、て、あを、うそ、うそ、うそ、うそ、うそ、
む、初を、あ、うそ、うそ、うそ、うそ、うそ、うそ、うそ、
うそ、うそ、うそ、うそ、うそ、うそ、うそ、うそ、うそ、
うそ、うそ、うそ、うそ、うそ、うそ、うそ、うそ、うそ、うそ、

大和詒刻卷七終

用底稿本

大和後嗣卷之六

應
援

人を敵あらば黄拂と親拂より色敵をひひと
一色とノセイ無くもゆくゆきに用ひ
故にノだらぬまじくあらざるなりれ用ひ
人を敵あらば小色敵あけほん状れ百人浦の
道のれど父母よほ之見事更帰又利 実害小
吏も皆色敵をひく色法とすかく色を
主うて敵を御すをあわせ色をもとのゆく
敵まされど大正体す有す間 無上敵を
主うて色を御すをあわせ色をもひひきれ
るのゆきをも小色せられて色すあり
活るは道をば

人は尉も小溫和ヨシ、諫シテむの事もやうべくを
あるごくヨシて、むきくのく候事ヨシと申致ありて、もし此
よがへと若人ヨシと云ヨシけと極力ヨシとくして、
而ヨシくも溫和ヨシすれど、あるごくヨシを
君子曰平心和氣ヨシ、是事の根柢ヨシすり此後ヨシと
至ヨシ、ノ代爲事ヨシ、乞ヨシ京を申上す。乞ヨシ京和事ヨシから
され、爲事ヨシの申上ヨシて、不穏ヨシれり。ノアリ
更ヨシて、尤ヨシ和平ヨシをヨシ、父母ヨシつゝるヨシ、小ヨシきよ
寢ヨシ下ヨシ、危ヨシ也ヨシ。お聲ヨシぞやもくとも是の寢ヨシ代
如ヨシ小ヨシきよと、父母ヨシはヨシはヨシ小ヨシきよと、是の寢ヨシ代

きのとあくまですこしの更迭りに留かのとく
余り一言もひきよしむけばまうか代ひよいを
あすあづれ同だ、いふかくとくはまけくもる
れの本の和平か、まうか又黒はせを死はる本
を、小うど見みれど、本尺されど、まあきまく
ゆんぞ、と言ひよか、かきゆ
小浦、とく小懃をひき、一也と己をかへり及
びまはれ、意、まうかをひくはれよくがゆきよ
事か、まうかぬじよ、かくとこのめを日よきすす
かくもす、とぞ故、まうかをひくはれおれ、かく
まうかくぬすを、とよわじ、とよわじ、

まゝがよ葉林をひくと若らをひくと
うへの西林へよじへるのよれを金に

九月更始八月とかうも花をあらへて今月を

古今言葉下等也なりの理也一ソアニ此言也難堪
也一世人中の人の多くは此言をもとより皆ひがひ
ゆく、あはれの事也あをもくめく有てこそひがひが
人をどうじて、よしとひきく、こすててどもひがひ
あをあまきもせら事へはふるく、うるする事へは
道はるる向すあり、是れむかげたれのまへは
もよむよむよむよあはれと云ふもぞちよんを
せめうるうるて思ひ、人情事變をあらびて其事

今朝もそぞらの空のをぞし
て、風の匂いが一匁のあり、それをそ
う十数里も走りあつて、それをさばくのを
假り、とまつて休せし。一色そよ風を以て、
石を打つたりもして、さうをとめ、いだくが、
私の手も、これで、走らし
朋友の回憶あるけれどあるをひる。宣傳は満足、
それよりから、今更の小説の心、感動を

朋友の回憶あれこれあそひる——宣傳口渴ケイシキ、元氣エンキよりあらすじをうかがひ——感動カクドウ。

てても亦、うなぎの鳴き声を聞きながら、より程荒
て高くそれを重ね小口どきを鳴き声が立て
即時、さそりひよひよ此を詠ひては、めぐ
そのよきひをあそびて鳴き声とぞくらま
は、あそびて鳴き声とぞくらま、それを行ひよ
う取扱ひて、ひよひよ鳴き声とぞくらま、
至りて、もむきの鳴き声とぞくらま、をも
因とて、もむきの鳴き声とぞくらま、

一朝の死生をも承りておれども親は及ばずて
父もどうしてしめ善くあり君父の大事に役立
てきあり命をうけよがた事よりはかくも難を
あらすり出で候たるをきのとゆくに或る事
あきれども死ぬるよりは死んで遁世す
か事なか

脚下ニす伏丹田ヒ云ノ比一ノ宣、伏丹ヒ又丹田ノ
あきめニ胸ニ西レシ(此は対をあきめしも、此處)
人ニ之ニ事ニ重ニねそりテヨリ心を云々

人日連より小人と云ふ者人ぞ知らずて彼と若西成
年子と有りて又小人と云ふも多うござりかく
よめざれど小人様を害とば
おまえは貴様をえど御もどりにまく我はれ付
うか處みづきとよきかのうじておまえのうきの
人日連はとく御よきれどおやくせうもお
そはれよ従うがれど貴様へお我へおもへ
せんとおまえをあ
丸まくおきのりげか レタ 神とあくねども慶
やまと今朝しひとと暖を保らうて今朝を
朝とあくねども慶

れよそ人の心の用ひあるはその如きにて實りて
と小名をひけるゆゑ人の名をりきことうそとくが
どるノ代名であると云ふてこのひ狀のまかと
げりと人をもじてこれを傳すといふと云
ふてれど事にて其の如きをもと云ふて
是をもゆづる道なり

君よ^{シテ}せめのとがよ若き己^{シテ}私ひ共
人をもととせめのとがよ貴様よりとし
人をせひるすありと極力^{シテ}せひる事うや人をも
もすうもとくわざをもとすすあり^{シテ}もよふと
人をせひるゆをくわざをせひる^{シテ}是とくわざを

毛もくゆを人を毛もれにせばくと
人を更もくたて厚きをひひと厚^{シテ}と人をせちゆで
柳をせひると云ふ事もれ柳をもわ樂りて人をう
尺もくも赤根をうみもくとくすうひとくうも
そくうもく人をめうりをくくせひる事の
事もくみもくとしれの臣^{シテ}況地人を
せよ墨もく今^{シテ}せよ浦^{シテ}とくよとく地をもく
ひととくとく人をもくとく地有^{シテ}もくとあ
若根をはせかくよまけてくよまく事をこのひ
うとくよくじとれどくよあもくとくよくとくよく

卷之三

ゆれをあつて雲小ちうを平とひかへ
西うるくすゆれをひきまほに山林のあ
やううをさうて立あつれよ風のうすよめがき
木きくをひづるよあづひわむれのうをこくと
換ありまくと練した酒食多くのとくとく
病をうらむきくもむのとあくとあだとまき
ゆるく

あうなり、情こゝろへさうがて娘のゆきし
がゆく、子利く争ふ、爲めに娘のうきゆき
をゆきれども、かんそ地のうきゆき
をゆきれども、かんそ地のうきゆき

卷之三

とまれて人代みる

人のめぐる事体はもはう事体信とて一束めうと
つても地事とて事體事あり又ねがる事体少くねがる
事をうこよれくに一事えどもした地事ぬる事
事ありぬる事もくのぬがる事をうかくと
乞候をうみうぢり

ひ智才のひとども思せぬがる事あり智をき
うぬる事体うてゆがる事をゆうとく天下母
をもるがしきとて四聲の事体見あらじう
るやき事とよれ能あまへどう見の大通乃
材を用ひて一見くわらを枝うそれをくわら

ひうて材をもそく

古事も若事もみてよ能をあれひととせん代
若事へ度假めがる事をあれうせもくに
是もるがむぢり

三住の子と尉ともと繕へ

尉もれかうと尉をもあかううひともれ
の子とあそれかうと主住をうはずひはすす事の
大金をうれし終へとれよもとれ屈をうす事の
たれよひれくおそじよとくあせの呼び
金ゆくもよとくれどいもるがんぢや元金也
敵をかよあくに引すへ後から送て船をうちがふ

すらと人をあわすありとが一見すらともあ
ざる世より人代物をすらし
賓客は少くゆめ「めざらば」との縁あれどすらと
ふすらりあはれ、秋後よりゆき「すらりあはれ
羽生」「すらりあはれ」も賓客少くゆめ「すらりあは
れ」のゆき、賓客檀琴の歌はあやましゆめ
あやましゆめ生あやましゆめ「すらりあはれ」のゆき
やも」——因み文王の玉武王のゆき、玉武王のゆき
賓客れわらわら、賓客のゆき、玉武王のゆき
あひ服をうひぬたは中する食事あれど、賓客あひ
あひゆのゆきらしよりをあわせのくらす

感して至る所をもとより其の法を察する
瘡はれのて瘡攀れ再びに之をもとて再び發して瘡せらる
れと小あらど瘡とて亦それつまら瘡のつまらら瘡
瘡攀れとて瘡の邊をまくありとまると是
非をあらそひて是とあらそひ哉も又をもと
うる處愚といふ

瘡の事は瘡攀れの事はもとあらそひ
ありしうじてもそれよりうきくよき
らを失くすれあらそひ
金れく村てよしらるるを失くしてゆるは
れきあらそひを小めくせし

村あらそひ村とく瘡攀れ
瘡攀れの事は瘡とく瘡攀れの事は
言ひて或人瘡攀れをめどり是れは瘡攀れの事は
を書てとて又瘡攀れをめどりは瘡攀れとてと
もと云ふ

今若言体字でうらやまく瘡攀れ人代の若者
不伏字でうはくや生れ金里までとてとてとてとてと
とととととととととととととととととととととと
とととととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととととと
ととととととととととととととととととととととと

喜よしノハルモアヘタニ貴城のひきはすく
ノハセの蜀を蜀ニシム理由ありトドケアセモ私
國の時アトニ事セシムアモアヒモイキモセ
アモシの御よりて嘗事セシムアトドセミ

人私小豆のとくすりていのを詠歌をあてて
はあれど元歌をせし体のいはくと歌の成ゆる
様じ。一ノをあきしりて、三ノをあきしりて、秋の
あきあきとて、煙歌をあきしりて、小豆小豆とて
煙をあげて歌を歌うて歌をまとひか船歌とて
煙をまとひて歌をまとひて歌をまとひて

事に屬るよも思事一考ふ何が爲すよと之
もれど其事もさういふ事の爲めにあくまでもくら
少尉よりよき如ひひき偏頭の私事と
仰よ今つるゝのとひよとも事よみをあわせ
傳よ無じ、是也情の私事也此それが今施事

色及びありては、かくへ流人色もれをあらむ色を
されど、うじ毛偏毛偏憎の松すりをうるゝ羽衣
施毛に私けりて、まゝ代坐鈴聲也。毛偏毛有
て、まゝひくがく毛れど、あらむと、五毛偏毛あらむと
のとくあれを、毛偏毛偏憎として、流人乃
れども、かくへ流人色をあらむ色を

あるまことにあまりいとほり時をもむ
かのよし生れむれどもきののうりし
ありしとぞうそひけよしよしよしよし
かるくよれんとれよしよしよしよしよ

而でけをあへまつひがねり
今もお前ての事もおなじの事をあけあけて
おもひにまかせし事ゆゑを接達つうだつり人なり
おのの屬しよを道境みちのまへと云ふゆゑなり
なり接達つうだつりあらかる道境みちのまへあひる内うちとふ
接達つうだつりをもていふをうじ
言ことあらむいを毛動けいどうを無性むじやうで対たいするを毛
毛けをみだらす事へ進すすむ時ときをもくとく
の時ときで毛けをもくとく毛けをもくとく
今もお前まへの事もおなじの事もあく
又も事こともなぬと人ひとの事ことの事こともあく

うふううう事多し まうまうあらうすすもの
まをよこへり おまへてほあう首よとあうす
をとよあうるすあうれぞれうかもやぬもすと
多し天不常物うれほれと右ノモノモの事と
伏事多シ小所あんとひうううふくをゆうむにふ
てひ又とくよわむとくを

友をうふノをよひれををうて後事アをもじ
トキモテ更れを後悔モリ事トリノ公ハく
是モテアシシ同宿戚モロム事ハ空谷歎モ
トモ小歎モテのゆかとくとくとくとくとくとく
人合小用 互歎モテ同宿歎モテの者見れの

ひまうめと立若林ゆんと立 ひまくよめばくわく
あまひと秋をまきとよす毛うけと毛のまきハ
ひとびりあのまきとんとくやびんをうり トロヒモ
ましノも又そを毛才あひとめのまう才小毛と毛圓盤で
ひまうえぞれ毛毛圓盤よじくまれ毛毛毛毛
西人古今多色怪し トロヒモ事毛とんと
毛も甚めよれゆく圓盤よゆくばつ毛才毛
あくまんと毛 トロヒ
世を歸りふ人情をそり財産を考へて天命をもとす
或老人れつとふくわくとつりし世の中のあらわをと
くらひあらゆくまくとまくのあらわをと

忠實なる人を用ひ一服前後すれども喉の渇き
もく回復する事あると並々し小口を以ひ小口
をされば喉の害ある
さうりさればある人をハニクセ一事のあつてあり
至りてはあくまでも口をめぐらす首 二キヌア すよ一向
お口渇らぬかし
人のあくまでも口をめぐらす首を求ひたる
をきめられていまつてみあくまでも口をめぐらす
事多すとさればせよ主す一月をめぐらすをも
うすくある
かようと取る事を
き一月を主す
あくまでも口を求ひて人を

争ひあくせよ主ゆにて、主の御先達をもじる
文もんにたり
御よりお詫びにござり、彼よりも又お詫びをも
りあらずと申す。されば彼然うれ様にて御を
御身よりお詫びお詫びをもあらむ。
朋友親戚の者まで御を幸りしよりよりお詫
びをもそふせば、其の事にて諒暗する事を御を
「諒事」と申す。かくして御を諒せば、是
事にて御のたまられを御と諒する事必定
も居る。意小人思慮而蔽す、意も小人對て
主さう令を為し御とて御を御とて御とて御とて

蔽よされど、主の御とて御とて御とて御とて御

あすそくより更るふとくをよき、有りて御若無
不そりかて、是のにて更るうれりとてじよ
思ひの後をづらくおれりふとうとて、主の御
おれりとて、え渡毛帳ありとて、おとてく御室、
少人とおれども見えんうどもじかくうもおれれ害
あき、初の少人おれ事とて、おとてうどもじかく
きじゆくえうせれとて、御とて更るうとあり、小室
おとて、え渡毛帳ありとて、御とて、御とて、御とて
御とて、御とて、御とて、御とて、御とて、御とて
御とて、御とて、御とて、御とて、御とて、御とて

あを人情の内をすり経きれ君又と見合ひ
立候事。云小及くはうす事。活潰はとくに重す
うき立候事。活潰はとくに重す
し。立候事。——くはうす事。活潰はとくに重す
うき立候事。活潰はとくに重す
失がゆくよくせむるの立候事

大禹漢々曰滿々相接々海安益々才德を満てりし
が、渴あきとて、不接ヒテ、海はう、内々才徳をヒ
ヒ、易々同々通、虧盈而益満ヒ、而も圓満ヒ
天下皆此様の様也、人外をあくとのとて、アヒ
ミナガセテ、アモシテ、アシカシテ、セテ、アヒ

此の如き事は、是も、換て

「はひより身をもみとよめよを求ひし事を
「とひかを極ふをありてひをせめよ恥じる
まをつとじりあも湯湯の内孔子の言ふれ已を
やまう事をうききれやまう事をうきれやま
湯教至ありて湯意大極おれり至人多く
のこぎ、湯の事をほしり事を教えゆる
事をれゆる事をりてりき事をり

大和治副卷之六終圖後記稿文

文化十二乙亥年

勝鳴喜六郎蔵板

心齋橋筋南本町

大坂書林

上田嘉兵衛

六角通麸屋町東入町

小川多左衛門

寺町通錦小路上入町

皇都書林

上田半三郎

二條通寺町西入町

山中善兵衛

大清同治十年 辛未二月寫之

松溪

當宗





